

向日葵の輝く海

ラフカディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

牧 野 陽 子

一 追憶の歌

ハーンの『怪談』（一九〇四）の最後の部分に、「ひまわり」（“Hi-mawari”）、そして「蓬萊」（“Hōrai”）という題のごく短い文章が収められている。

「ひまわり」では歌の一節をめぐる追憶を、「蓬萊」では一幅の絵をめぐる随想を記しており、両作品ともに、『怪談』の中心をなす再話作品群からは独立した別種の作品と考えられてきた。その一方で、この二つの小品、特に「ひまわり」が、読後に深い印象を残すことも多くの人が認めるところである。

向日葵の輝く海 ラフカディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

向田葵の輝く海　　ラフカディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

「ひまわり」は子供の頃の思い出を記した随想で、アイルランド民謡の一節が引用されていることでも知られる。追憶はこう始まる。

On the wooded hills behind the house Robert and I are looking for fairy-rings.

(家の裏の森になった岡の上で、ロバートとぼくは妖精の輪を探している。⁽¹⁾)

森のなかで、妖精の輪を探す二人の子供の姿を映し出したハーンは続けて述べる。「ロバートは八つで、愛らしくて、とても利口だ。ぼくは七つになったばかりで、…それでロバートをすごく尊敬している。それはお日様がかくやくと輝く八月の日で、暑い大気は、刺すように鋭い、甘酸っぱい松脂の匂いで満ちていた。」

妖精が夜、輪になって踊った跡が草の上についたものだと言われるフェアリー・リングのなかで不覚にも眠ってしまった男が行方知らずとなったというケルトの伝説を思い出すと、ロバートが、「あいつらは尖った針の先しか食べないんだよ」と言い、「ぼく」は怖くなる。二人のまわりには、松ぼっくりがたくさん落ちていて、細く尖った松の葉をも好んで食べそうな妖精の存在が急に身近になるのである。そのとき、ジブシー風の豎琴弾きが家にやってくるのが見える。「ハープ弾きだ!」と叫んで、子供たちは家へ急ぐ。放浪の歌人は、見るからにがさつな姿で、ハープをボロンと鳴らしたと思つた、しわがれた低い声で歌いだした。

Believe me, if all those endearing young charms,

Which I gaze on so fondly today

(信じておくれ、見ているだけで惚れ惚れする、

今日のこの日の、若やいだ美しさが……)

最初、(幼いハーンと思われる)子供は激しく反発した。そのアイルランド歌曲は、「ぼくの小さな世界のなかで一番美しい、最愛の人がかつて歌ってくれた」歌だからである。「お前なんか歌っちゃだめだ」とさえ子供は思う。ところが、野卑な来訪者の声は、オルガンの低音のように澄んだ音色へと変わった。朗々と歌いあげるその響きの美しさに、子供のハーンは感激のあまり涙してしまう。そして自分に魔法をかけたに違いないその男を恐れ、思わず憎んだ。

ロバートは、「泣かされちゃったね」と小さい子を慰めようとす。そしてあれはゴブリンだろうか、妖精だろうか、また戻ってきたらどうしよう、と心配するハーンに対して、「あれはジプシーだよ。子供をさらったりする悪いやつらだけど、戻ってはこないよ。少なくとも昼間のうちはね」と言って、子供のハーンは、漠たる不安のなかに取り残される。

幼い日の追憶はここでとぎれる。そして場面は、ハーンの現在へと変わる。東京の高田村で一本のひまわりの花をみかけて、四十年前も前の、あの放浪のハープ弾きの声が鮮やかによみがえったのだという。それは歌の最後の二行の歌詞に、ひまわりの花が登場するからなのである。

向田葵の輝く海 ムカディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

As the Sunflower turns on her god, when he sets,

The same look that she turned when he rose.

(ひまわりが、神とも慕つお日様に、日が昇るときに向けた

その同じまなざしを、日が沈むときにも向けるがごとくに)

ひまわりの姿に変わらぬ愛をたとえて歌う、昔日の調べを思い起こしながら、ハーンの脳裏には、ふたたび、「あの遙かなウェールズの丘の、日の光がまだらにあたっている樹陰」が浮かぶ。「ロバートが、一瞬ふたたび、私の傍らに立っていた。あの少女のような顔、あの金色の巻毛そのままに。ぼくらは妖精の輪をさがしていた。……だが、現実のロバートはもうずっと前に海の力によって変えられて、見知らぬ豊かな何かと化してしまつたにちがいない。……人、その友のために己の命を捨てるのは、愛のこれより大いなるはなし……」。

ハーンは、ロバートの死をこのように示唆して、筆をおく。

静かな幻想性を漂わせる短編「ひまわり」は、『怪談』の中心をなす怪奇な再話物語十数編の後に、そつと添えられている。読者は、「耳なし芳一」以下の意を尽くした物語群のあとに、原著で三頁強のこの小品を読むと、不思議な気分に含まれる。それは、はからずもハーンの心の内にしまわれていた幼き日の映像を一瞬間間見、ハーンの幼き日の声を耳にした感慨だともいえるし、一方ではまた、怪談でも再話作品でもない、この作品を『怪談』というハーンの代表作の中でどのように位置づけるべきか、というかすかな戸惑いだといつてもいいだろう。

放浪のハープ弾きの歌として引用されているのは、かねて指摘されてきたように、アイルランドの国民詩人と
いわれるトマス・ムーア (Thomas Moore, 1779-1852) の無題の詩“Believe me, if all those endearing young charms”
(『アイルランド歌曲集』 *Irish Melodies*, 1807-35 所収) の冒頭と最後の部分である。ムーアの名前への言及はないが、
それは、わざわざ言及しなくても、英語読者の誰もが知っている歌曲だからだろう。

ハーンは、東京大学での文学講義のなかでロマン派の詩人の一人としてトマス・ムーアをとりあげている。⁽²⁾ ム
ーアがアイルランド、スコットランド、イングランドに伝わる民謡を集め、曲を整え、歌詞をつけて『アイルラ
ンド歌曲集』としてまとめたこと、ムーア自身音楽家であり、社交界の客間でピアノの弾き語りをして人気と名
声を博したと述べている。ムーアの言葉はつねに美しく音楽的で、ほとんど、どの家庭でも愛唱されていたとハ
ーンは言う。甘悲しい素朴なメロディーをもつ“Believe me…”は讃美歌四六七番としても歌われ、アメリカで
はハーバード大学のカレッジソングとなり、また日本でも堀内敬三訳詞の「春の日の花と輝く」として昭和初期
以降、広く親しまれた。⁽³⁾ 意識ながら、原詩の雰囲気をつまく伝えているとされる堀内の訳を次に示しておこう。

春の日の 花と輝く うるわしき すがたの

いつしかに 褪せてうつろう 世の冬は 来るとも

わが心は 変わる日なく 御身をば 慕いて

愛はなお 緑いろ濃く わが胸に 生くべし

向日葵の輝く海 ラフカディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

向日葵の輝く海 ムファディオ・ハーンの“H-mawari”について

若き日の 類は清らに わずらいの 影なく

御身いま あでにつるわし されど面^{おもて}あせても

わが心は 変わる日なく 御身をば 慕いて

ひまわりの 陽をば恋つごと とこしえに 思わん (堀内敬三訳)

つまり、たとえ若々しい美しさがやがて衰えようとも、向日葵がいつも太陽を慕って見ているように自分の想いは変わることはない、だからこの真実の愛を信じてほしい、という意の歌なのである。

このアイルランド民謡にまつわるハーンの幼い日の情景が、濃厚なケルトの雰囲気を漂わせつつ、北国の夏の草いきれのむせるような香りとともに、あざやかに描かれていることが、この短編のまず第一の魅力だろう。八月の太陽、木漏れ日のさす森のなかの草むら、放浪のジブシーのハーブ弾きの奏でる調べ、妖精の輪にまつわるウェールズの昔話、妖精やゴブリンがいまなお息づく丘の松林の情景と、異界からの訪問者としての放浪の吟遊詩人の姿が、ハーンの記憶のペールのかなたに浮かび上がってくる。

作品の舞台は、ハーンが大叔母のブレナン夫人に連れられて逗留した夏のウェールズであるとも、父の姉キャサリンの嫁ぎ先であるエルウッド家があるメイヨー州・コング村であるともいう。作品の中に出てくるのは、幼馴染の従兄ロバート・エルウッドであるとされている。⁽⁴⁾

その従兄弟と過ごした八月のある日の出来事が詩情豊かに描かれたあと、四十年の時をはさみ、従兄弟の死が最後に伝聞のように示唆される。後に海軍に入ったロバートが友を救おうとして海で亡くなったことを、事実と

して叙述せずに、“Robert must long ago have suffered a sea-change into something rich and strange.”と、言葉少なく暗示するのである。「海の力をこつむつて、見知らぬ豊かなものとなる」というフレーズが、ハーンは明示しないが、シェイクスピアの『テンペスト』の一節、妖精アリエルの有名な歌の一節を引いたものであること、後に続くのがまた良く知られた聖書の言葉「人、その友のために己の命を捨てるのは、愛のこれより大いなるはなし。」(ヨハネ伝15:13)であることも、すでに再三指摘されている通りである。⁽⁶⁾

そして「ひまわり」は、ハーンの知られざるアイルランド時代について知らしめてくれる自伝的な小品としてこれまでとらえられ、「さながら寄せ木細工のように、いくつもの引用句がはめ込まれていて」作品世界の雰囲気盛り上げられている(斎藤裕)、⁽⁷⁾「小細工の積み重ねからできあがった凝りに凝った一文」(西成彦)であると評されてきた。

では、このような「凝りに凝った」短編を、ハーンは、なぜ、『怪談』の末尾に収めたのか。

「ひまわり」の追憶の場面に登場する従兄弟の死が最後に示唆され、聖書の言葉が捧げられているため、森亮は「ひまわり」は「鎮魂の歌」として書かれたとし、⁽⁹⁾西成彦も同様に、「ひまわり」は「生者から死者に向けられた手向けの言葉」であるとした。そして、怪談とは「生者と死者の交流を語る形式」であるのだから、そのなかにハーンは「ひまわり」という私的な哀悼の文章を差し挟んだのだらうと述べた。⁽¹⁰⁾別の意見としては中田賢次が、この小品は「白昼に悪鬼(ゴブリン) (ハープ弾き) が出現するところが興味の中心」であり、「得体の知れない怪物が出現した白昼の悪夢、すなわち真昼の怪談」なのだとする。⁽¹¹⁾

だが、ハーンはただそのような、怪談に類する一作品として、「ひまわり」を追加したのだろうか。⁽¹²⁾

中田によれば、『怪談』を刊行するための当初の計画を記した目次一覧（「パレット文庫」蔵）に「ひまわり」はなかったという。¹³「ひまわり」には、その前身と見られる「民の声」（Vox Populi）という作品があり、ハーンはこの「民の声」を、「私の守護天使」「偶像崇拜」「私の最初のロマンス」「直感」など、ほかの自伝的断片として知られる小品と共に、題名を『思い出』（Memories）とする単行本の中で発表する予定だったらしい。ところが、ハーンは、「民の声」だけを、タイトルも「ひまわり」に変更した上で、『怪談』に加えた。

この計画変更は、何を意味するのだろうか。もし「ひまわり」が、単に私的な追悼文、または、幼時の怪奇体験の回想にすぎないのならば、最初の計画通りに、他の自伝的小品集とともに『思い出』と題して一冊にまとめたはずだろう。それをせずに、この作品をあえて『怪談』の末尾に収めたのだとしたら、それは「ひまわり」という作品に、『怪談』という著書全体と密接に関わる意味を持たせたからだ、と考えるべきではないのか。ではこの作品にこめられた、ハーンの意図は何か。

それを解く鍵は、第一に、冒頭と最後のふたつの映像の重なりであり、第二に、ムーアとシェイクスピアの詩句の解釈ではないかと思われる。

II “seachange into something rich and strange.”

「ひまわり」という作品では、全体の四分の三が幼き日の出来事の叙述にあてられ、最後に追記のように、一本の向日葵の花をみつめながらその過去を思い出したことをハーンが述べる。過去の回想が現在の情景のなかに

集約される、濃密な一段落であるといつていい。⁽¹⁴⁾

この追記によって、作品全体が深い印象を残すのは、幼き友の死を示唆する語句“Robert must long ago have suffered a sea-change into something rich and strange.”の一文によって、最後に海の映像が広がり、その海の映像にケルトの丘の景色が重なること、そして、この二重の映像が、ハーンが見た一本の向日葵の花によって誘発されることにあると思われる。夏の光、青い海原と、丘の松林、ひまわりの花　これらが一枚の絵となって読者の脳裏に広がり、深い余韻を残すのである。

すでに述べたように、作品冒頭で描かれるのは、夏のケルトの森の草地である。明るいい日差しと、ほの暗い森の木陰が光の対照をなし、妖精の輪が影のように見え隠れする。この情景が、最後の場面でひまわりの花を見たことで再び想起され、ロバートが沈んだ海の景色に重ねられることで、作品の奥行きが深まり、印象を強めているのである。丈高い草が風になびく映像が、波光きらめく海原の映像に変わり、妖精の輪が、海の渦巻きとなつて、人を呑み込み、命を奪つ。妖精伝説に漂う不安感、ロバートの死の予感でもあったわけだ。そして、海と松林の二重の青緑の広がりのおかげで、黄金色の向日葵の花と、金髪のロバートの面影が浮かぶ。「ひまわり」という作品を支配するのは、陽光とひまわりの黄金色、森と海の青緑色という二つの色彩の印象なのだといえる。そして、「ひまわり」は、『怪談』最後の再話作品「安藝之介の夢」と同様に、この二つの色彩の光にあふれ、⁽¹⁵⁾光と海のイメージが、一本の向日葵の花の映像の上に重ねられているのである。

この重層的なイメージを支えているのが、ムーアの歌曲とシェイクスピアのテンペストからの一節の引用であることは間違いないのだが、ここで気づくことは、二つの詩歌が、その重要な部分を省いて引用されていて、そ

向田葵の輝く海 ミフカディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

のために、新たな意味に包まれているといっているである。

ではまずムーアの詩がどのようなものか見よう。先に日本で親しまれている堀内の意識を掲げたが、ムーアの元の英語は次の通りである。

Believe me, if all those endearing young charms,

Which I gaze on so fondly today,

Were to change by tomorrow and fleet in my arms,

Like fairy gifts fading away

Thou wouldst still be adored, as this moment thou art,

Let thy loveliness fade as it will;

And around the dear ruin each wish of my heart

Would entwine itself fervently still.

It is not while beauty and youth are thine own,

And thy cheeks unprofaned by a tear,

That the fervor and faith of a soul can be known,

To which time will but make thee more dear.

No, the heart that has truly loved never forgets,

But as truly loves on to the close:

As the sunflower turns on her god when he sets

(16)

The same look which she turned when he rose.

信じておくれ、見ているだけで惚れ惚れする、

今日のこの日の、若やいだ美しさが

たとえ妖精の贈り物のように消えてしまい

明日には移ろいゆき、腕のなかでしおれてしまつても、

わが愛は変わらない、今と同じように貴女を愛するだろう。

あなたの美しさが褪せるならば、褪せるがいい

廃墟となつた愛しいあなたの体に わが心の願いは

青々としげる緑の蔓草の様に絡みつくだろう

若さと美しさがあなた自身のものである間は、

あなたの頬が涙にぬれない間は、

魂の情熱と信仰がいかなるものかはわからない。

向日葵の輝く海 ラフカディオ・ハーン の “Hi-mawar” について

向日葵の輝く海 ムファディオ・ハーンの“H-mawari”について

時は、ただ、あなたを一層愛しいものとするだろう。

真実の愛を知った心は、決して忘れない。

最後まで、真に愛し続けるのだ。

ひまわりが、神とも慕うお日様に、日が昇るときに向けた

その同じまなざしを、日が沈むときにも向けるがごとくに

ハーンが引いていないのは、第一連第三行以下、第二連第六行までの、詩の中核部分である。ムーアの歌は、相手への変わらぬ愛を誓うものだが、ここでは真実の愛の永遠性が、肉体の衰えと対比されている。若さ美しさも、花が萎れ、枯れるように、やがては消えつせる。相手の未来の姿を“*the ruin*”（廃墟、骸）として想像するのである。つまり、この詩は、愛の歌でありながら、むしろ「朝には紅顔ありて夕べには白骨となる」と同趣旨の宗教性が色濃く投影されているといえよう。死すべき存在としての人間と、変わらぬ精神的愛が対比されているからこそ、賛美歌としても歌われ、大学のカレッジソングにもなるのだろう。そしてここで向日葵の花は、みずから枯れてゆく定めの花でありながら、夏の太陽をみつめ続ける存在として象徴的にとらえられている。

だが、ハーンが作品のタイトルに掲げ、最後に登場させる、高田村の向日葵の花が果たす役割は、異なっているのではないか。ハーンの「ひまわり」のなかでは、ムーアの詩の中の、萎れる、枯れる、廃墟、骸といった具象的な負のイメージの言葉で構成される重要な歌詞の部分をあえて引いていないのである。ハーンは決して、「人間の運命のはかなさと、妖精の魔力の容赦なさを語るために、わざわざトマス・ムーアを引いてきてい

る。⁽¹⁷⁾（西成彦））のではあるまい。むしろ、最後の段で登場させた向日葵をきっかけに、海のイメージが導かれることが重要なのではないか。つまり、草原を海原に重ね、変える、いわば触媒の働きをするのが、太陽の光をみつめる向日葵の花なのだといえよう。ハーンが親しんだギリシャ神話で、太陽の神アポロンを慕い続けて向日葵の花と化したクリュティアが、海の神オケアノスの娘、海のニンフであつたことを思えば、海に帰るべきもの、海に親しいものとしての向日葵の力によって、草原と海と太陽はごく自然にひとつの映像に重なりあう。では、その海原の広がりというのにハーンが引いた『テンペスト』からの一節は、ただロバートの死の場所の衛学的な示唆にすぎないのだろうか。ここでもハーンがやはり直前の重要な語句を省いて引いていることに留意したい。『テンペスト』第一幕第二場のアリエルの歌は次のようなものである。

Full fathom five thy father lies;
Of his bones are coral made;
Those are pearls that were his eyes;
Nothing of him that doth fade,
But doth suffer a sea-change
Into something rich and strange.
Sea-nymphs hourly ring his knell:
Ding—dong!

向日葵の輝く海 リンカディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

向田葵の輝く海 ムフカディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

Hark! Now I hear them, Ding-dong, bell! (Tempest, I, ii. Ariel)

君の父は五尋海の底、

その骨はいま白珊瑚、

かつての二つの目は真珠、

その身はどこも朽ちはてず、

海はすべてを変えるもの、

いまでは貴重な宝物

海の妖精、弔いの

鐘うち鳴らせ、

お聞きよお聞き

(小田島雄志訳『テンペスト』)

妖精アリエルは、海難にあつて助からなかったナポリ王のことを歌っている。海底に沈んだ王の体は朽ち果てることなく、その骨が今は珊瑚となり、目は真珠と化したといつのである。だから“sea-change into something rich and strange.”は、シェイクスピア作品の詩句としては「海の力に変えられて、今は貴重な宝物」と訳される。珊瑚の白骨、真珠の眼という表現は、宝石で飾られた聖者の遺体をどこか連想させるが、ハーンは、このような具象的な死のイメージの言葉を引かずに省略した。その具体的な描写の部分を削除することで、海底に横たわる冷

たい骸の姿は消される。そして海の力によって“something rich and strange thing”と化すことは、まさに海の豊饒の異世界に溶け込むことだと、ハーンは言いたいのではないか。死して、海底の聖遺物となつて残るのではなく、広大な海の「何か不思議な豊かなもの」のひとつとして昇華されていく、そんな感慨で「ひまわり」は閉じられるのである。

近代以降の数多くの向日葵をモチーフとした芸術作品には、良く知られたゴッホの絵や、草原の向日葵の群生を描いたポーランドの画家ヤン・スタニスラフスキ（一八六〇—一九〇七）の絵、⁽¹⁸⁾ウクライナの向日葵畑を舞台にした映画「ひまわり」など、いずれも真夏の生命の謳歌に死の影を漂わせているものが多い。ムーアの歌曲もまたそのひとつといえるかもしれない。

ハーンの「ひまわり」は、向日葵の花を登場させて、そうした作品群に伍する印象深い佳作といえる。異なるのは、死が「豊かな異世界のもの」と化す海のイメージを向日葵の花が喚起することだろう。（海と向日葵が鮮やかに一枚の絵に収まるさまは、同時代の他の西欧の作品よりも、むしろ後の水原秋櫻子の句、「向日葵の 空かがやけり 波の群」（昭和十一年『岩礁』所収⁽¹⁹⁾）をどこか連想させる。）

では、ハーンはなぜこの作品「ひまわり」を『怪談』の末尾に収めたのか。それは、ハーン自身が“a sea-change into something rich and strange.”という海の力を受けて、不思議な豊かなものへと変わりゆくことを実感していたからなのではないか。幼き日にともにケルトの森のなかで妖精の輪を探していた二人は、今ともに、それぞれが“sea change”を受けたと、ハーンは感じたにちがいない。もちろん、ここでハーンが“海”を思い描くとき、それは、ロバートの命を奪い、テンペストのなかでナポリの王を沈めた海であるだけでなく、より深く根源的な

イメージに満ちた海原の広がりであることはいうまでもない。それは、「東洋の土を踏んだ日」の最後に、ハーンが訪ねた寺の内陣の鏡に映った海であり、「夏の日の夢」に描かれた浦島伝説の海であり、「焼津にて」でハーンが耳をすませた海の音楽でもあり、何よりも、ハーンが最終的に日本にいたった人生で見てきた様々な海の情景、それらすべてを含んだ「海」なのである。

そして、ハーン自身の感性が、世界に対するイメージが変わったのだ、ということをも、さらに海と大気と空のイメージに託して述べているのが、「ひまわり」の次の小品、「蓬菜」なのではないか。「蓬菜」は、蓬菜を描いた掛け軸の絵をめぐる随想という形をとった短編であり、失われゆく「蓬菜」に日本を見立てて、その行く末を歎じた文化論とみなされてきた。だが、この作品において印象的なのは、冒頭で絵を説明するとき、青い海の描写であり、ついで、最後の、日本の大地を覆う空と白い大気の描写なのである。

ハーンは、日本で最も素晴らしいのは、大気であり、太陽の光はどこよりも「白い」のだという。柔らかな陽射しがあふれる大気は、酸素と窒素の合成物ではなく、「何億何兆の世代の靈魂がひとつの巨大な透明体となったもの」に他ならないという。そして、その大気を呼吸すると、体の内なる感覚が変わっていき、時間と空間の概念が再形成されるのである、と述べた⁽²⁰⁾。つまり、ハーンは、「白い大気」に満ちる無数の靈の微細な顫動が体に染みわたって、自分のそれまでの世界に対する感性が変わったのだと告白しているのである。自分が「過去の世の様々な物のなかに生きて」きて、「未来の生存物の目で同じ太陽を見るにちがいない」と考えるにいたったことを言うのである。死者の魂が澄んだ白い大気、光のなかに満ちあふれている、このイメージは、「白い光」、「霊の海」などの表現でハーンの来日以降の作品に再三登場する、ハーンにとっての根源的な映像である

ことはいうまでもない。

「ひまわり」は太陽が輝く夏の森にはじまり、海の映像で終わる。「蓬萊」はちょうど対をなすように、海の絵の描写から始まり、大地をおおう白い大気にひたつて終わる。ともに海の広がりが印象的な二つの作品は、かたやアイルランドの情景を、かたや日本の景色を描いている。いわば、ハーンの心象世界を支える二つのイメージであるといえる。

『怪談』はハーンが手にした、最後の著書である。ハーンがようやくその本をまとめあげた頃、あるいは、走馬灯のように人生のさまざまな場面が想起されたのかもしれない。映像の重なりが印象的な小品は、そのようにして生まれた。そして、ハーンの人生の起点と終点を表すふたつの作品は、いわば二枚の鏡、合わせ絵のように向かいあい、二本の燭台のように、作品集『怪談』の空間を照らし、支えているのではないか。最後の二つの小品、二枚の絵の間に、something rich and strange としての怪奇な再話作品の数々が、そしてハーンの人生があるのである。だから、ハーンは「ひまわり」を著書の末尾に添えた。「ひまわり」という小さな作品をつつむ静かな不思議な光は、『怪談』にいたった人生をみつめるハーンの遙かな視線の光なのだろう。

【参考文献】

・ *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. II, ed. Elizabeth Bisland, Boston: Houghton Mifflin, 1922

・ 平川祐弘訳「ひまわり」、平川祐弘編訳・小泉八雲名作選集『明治日本の面影』講談社学術文庫、一九九〇年

向日葵の輝く海 ラフカディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

向日葵の輝く海 ラフカディオ・ハーンの『Hi-mawari』について

・森亮「ハーン再考 晩年の隨筆と觀想文」『小泉八雲の文学』恒文社、一九八〇年

・齋藤裕「ラフカディオ・ハーン「ひまわり」を巡って」『怪談』小論、『流通經濟大学社会学部論叢』十一(一)、二〇〇〇年十月

・西成彦「生者から死者に向けて」『向日葵』を読む、『耳の悦樂 ラフカディオ・ハーンと女たち』紀伊国屋書店、

二〇〇四年

・中田賢次「怪談「ひまわり」を読む」『へるん』第四十三号、八雲会、二〇〇六年

・*Irish melodies and sacred songs* / by Thomas Moore ; from the last edition of his collected works, London, 1849 : (Re-printed by Munroe & Francis, Boston)

・T・ブルフィンチ『ギリシア神話と英雄伝説 上』佐渡谷重信訳、講談社学術文庫、一九九五年

・多田智満子『花の神話学』白水社、一九九一年

・水原秋桜子『水原秋桜子句集 自選自解』白鳳社、一九七七年

・水原春郎編『秋桜子俳句365日』梅里書房、一九九〇年

・同『秋桜子歳時記』富士見書房、一九九一年

・小川万海子『ウクライナの発見 ポーランド文学・美術の十九世紀』藤原書店、二〇一一年

・堀内敬三編『世界大音楽全集 第二 第二十七、二十八卷 声楽篇世界民謡集』音楽之友社、一九五七年

(1) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 11, ed. Elizabeth Bisland, Boston: Houghton Mifflin, 1922, p. 259

平川祐弘訳「ひまわり」平川祐弘編訳・小泉八雲名作選集『明治日本の面影』講談社学術文庫、一九九〇年、四五
六頁。以下、「ひまわり」からの引用の訳文は、平川訳を基本にして一部変更を加えている。

- (2) "Pre-Victorian poets", *A History of English Literature in a series of lectures, vol. 2*, Compiled and edited by Ryuji Tanabe and Teisaburo Ochiai, Tokyo. The Hokuseido Press, 1927
- 「ロマンチズム群小詩人」西脇順三郎・森亮監修『ラファディオ・ハーン著作集 第十二巻 英文学史』所収、恒文社、一九八八年
- (3) 堀内敬三(一九八九七 一九八三)はこの曲以外にも、「遠き山に日は落ちて」(ドヴォルザーク「新世界より」第二楽章に作詞)「君よ知るや南の國」「モーツァルトの子守歌」「ジングルベル」などの訳詞でも知られる昭和の代表的な音楽評論家。
- (4) 歌曲を口ずさんでいた「最愛の人」は、キャサリンのことだという説もあり、ジブシーの歌人のモデルへの言及もある。(ポール・マレー『ファンタスティック・ジャーニー』村井文夫訳、恒文社、二〇〇〇年)
- (5) *The Tempest*, edited by David Lindley, (The New Cambridge Shakespeare), Cambridge University Press, 2002
- 小田島雄志訳『テンペスト シェイクスピア全集三十六』白水社(白水リブックス)、一九八三年
- (6) 森亮「ハーン再考 晩年の随筆と観想文」『小泉八雲の文学』恒文社、一九八〇年
- 齋藤裕「ラファディオ・ハーン「ひまわり」を巡って」『怪談』小論』『流通経済大学社会学部論叢』十一(二)、二〇〇〇年十月
- 西成彦「生者から死者に向けて 「向日葵」を読む」『耳の悦楽 ラファディオ・ハーンと女たち』
- (7) 齋藤、八頁
- (8) 西、一〇一頁
- (9) 森亮、八十六頁
- (10) 西、一〇一 一〇二頁。
- 向日葵の輝く海 ラファディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

向田葵の輝く海 ラフカディオ・ハーンの“H-mawari”について

(11) 中田賢次「怪談「ひまわり」を読む」『へるん』第四十三号、八雲会、二〇〇六年、十三頁。

(12) 齋藤裕は、前掲論文において、「ひまわり」は森の指摘したとおり鎮魂の歌であるとしつつ、私的な回想の文章を『怪談』に収録したことについて、「読者の意表を突く」というハーンのいたすら心を見て取りたいと思う。あるいは ユーモア と言い換えてもよいかもしれない。さらに言えば、その裏に、ひよっとしてハーンのはにかみも隠されていたのではないか。」と述べている。(前掲論文、三頁)

(13) 中田、前掲論文。

(14) 森亮は、「これがなければこの一篇はひ弱な作品にすぎない」と的確に評した。(前掲書)

(15) 牧野陽子『時をつなぐ言葉 ラフカディオ・ハーンの再話文学』第九章「地底の青い空」「安藝之介の夢」、新曜社、二〇一一年

(16) *Irish melodies and sacred songs* / by Thomas Moore ; from the last edition of his collected works, London, 1849. [Reprinted by Munroe & Francis, Boston]

(17) 西、九十九頁。「ムーアの歌を意図的に曲解」して、「人間の運命のはかなさと、妖精の魔力の容赦なさを語るためだけに、わざわざトマス・ムーアを引いてきている。揺るぎない忠誠心の象徴である向田葵が、むしろ世界のつつろいやさを映し出す鏡として引き合いに出されていると言ってもよい。かなりの荒技である」と西は述べるが、ハーンがこのような解釈でムーアの詩を引いたならば、それはムーアの詩そのままの解釈となり、「曲解」でも「荒技」でもないだろう。

(18) 小川万海子『ウクライナの発見 ポーランド文学・美術の十九世紀』藤原書店、二〇一一年

(19) 水原秋桜子『水原秋桜子句集 自選自解』(一九七七年)講談社、二〇〇七年、三十九頁。この句は、海辺の向日葵を取り上げた「波太風景」という五句からなる連作の第一句で、秋桜子は、「波太の磯もたしか漁村で、岩礁を

乗り越えて来る波が光り輝いていた。その磯に空想の大向日葵を咲かせ、周囲を波光で取り囲んでしまうことが、私のねらいどころなのであった。…捜してみれば、向日葵は必ずあったにちがいない。…しかし、私はそれを捜すことをせず、空想の向日葵だけで十分だと思った」と述べている。

向日葵が短歌、俳句の主題として取り上げられるようになったのは、明治以降である。花が日本に伝わったのが江戸時代、当時は「文菊」と呼ばれたが、元禄時代のころに向日葵という名前が広まったとされる。絵に描いたものとしては、「向日葵図」（鈴木其一）、「日葵雄鳥図」（伊藤若冲）、「向日葵に蠅螂図」（酒井抱一）などがあるが、明治以降、新しい夏の季節として好んでとりあげられるようになった。ゴッホの紹介などももちろん影響しただろう。極めてよく知られた作としては、

向日葵の ゆさりともせぬ 重たさよ（北原白秋）

向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高し日のちひささよ（前田夕暮『生くる日に』）

髪に挿せばかくやくと射る 夏の日や 王者の花の こがねひぐるま（与謝野晶子『恋衣』）

などがあげられる。こうしたなかでも、やはり水原秋櫻子の作は、海辺の空想の向日葵を描いている点が際だつ。もちろん秋櫻子がハーン作品を読んでいるかどうかは、わからない。なお、参考までに、連作の他の四句を次にあげておく。

向日葵に 馳せくる波の 礁を超ゆ

向日葵に たぎちて帰る 波の列

向日葵の輝く海 ラフカディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

向日葵の輝く海 ラフカディオ・ハーンの“Hi-mawari”について

向日葵に とほき紺青の 波の列

向日葵が 咲くのみ運河 廃るるか

(20) “Horai”, *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 11, p. 265